高岡塚古墳発掘調査報告書

1985

山東町教育委員会
財団法人 滋賀県文化財保護協会

はしがき

山東町は、中部地方と近畿を結ぶ要路に位置し、早くから人々の生活の舞台として繁栄し、貴重な文化財が数多く残されています。これらの文化財を保護し、正しく後世に伝えていくことは、私たち現代に生きる者の責務と言わねばなりません。

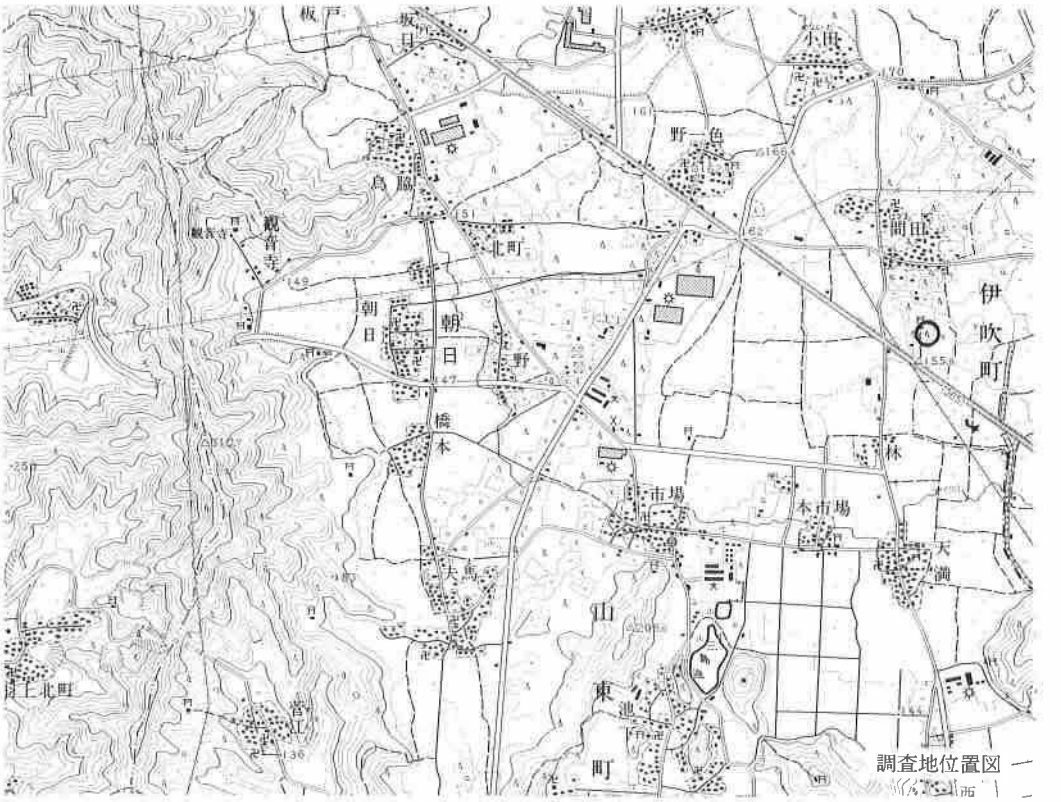
このたび発掘された高岡塚古墳は、姉川の上流に位置する古墳として早くから注目されていた古墳の一つです。調査にあたっては、土地所有者大沢興業株式会社の御理解のもとに、県教育委員会の指導をうけ、発掘調査を滋賀県文化財保護協会に委託いたしました。幸い古墳は関係者の御尽力により保存されましたが、ここに高岡塚古墳発掘調査の報告書を発刊し、多くの方々の参考に供したいと思います。

昭和６０年３月

山東町教育委員会
教育長　西　秋　良　策

調査主体　山東町教育委員会
調査機関　財団法人滋賀県文化財保護協会
調査参加者　兼康保明（滋賀県教育委員会文化財保護課技師）
奈良俊哉（滋賀県文化財保護協会技師）
大柳仁司（調査員）
調査協力　大沢興業株式会社

高岡塚古墳全景



調査地位置図 一

1．はじめに

高岡塚古墳は、坂田郡山東町間田字岡に所在する、横穴式石室を内部主体にもつ古墳時代後期の古墳である。しかし、墳丘は早く失われ、天井石と石室の石材各１点が地上に残されているだけの状況であった。地形的にみると、式内社岡神社の鎮座する伊吹山西南麓のなだらかな低丘陵の南端部に築造されている。

昭和16年に刊行された『改訂近江国坂田郡志』第１巻によれば、「大原村大字間田郷社岡神社大門の東側、小字岡にあり。中古発掘せられ、四圍耕地となりしも、石槨の巨石は依然として其所に存す。巨石を測定せしに、縦約八尺八寸、横中央幅約四尺三寸あり。当時可成大古墳なる事を知るべし。口碑伝説湮滅すれども、其の位置より考ふれば、此古墳は古へ岡神社と密接な関係ありしものなるべし。岡神社境内一帯を高岡と称す。其の他、郷内には二位岡・中岡（入善寺境内）・狐岡・鞍骨岡の小字名存すれども、口碑・伝説無し」とある。

また付近には、岡神社北方のゆるやかな丘陵に、番庄塚古墳、唐古塚古墳、日御子社古墳、間田廃社古墳などが点在する。これらの古墳は近接して群集せず、ある限られた地域内に、ある程度の距離をへだてて、各々が独立して営まれている点に分布の特色が認めら

れる。このうち、唐古塚古墳は、前方後円墳ではないかといわれている。

2．調査の経過

昭和59年10月、大沢興業株式会社より岡神社の東側一帯を宅地造成するにあたり、埋蔵文化財の有無について協議があった。町教育委員で造成予定地内を調べたところ、高岡塚古墳と、他に一カ所古墳の天井石かと思われる巨石の露頭があることを確認した。そこで遺跡の取扱いについて県教育委員会文化財保護課の指導をあおぎ、大沢興業株式会社と再度協議を行った。その結果、保存資料を得るため、高岡塚古墳と古墳推定地の二カ所について発掘調査を実施することになった。

発掘調査は町教育委員会が調査主体となり、事業を財団法人滋賀県文化財保護協会に委託した。現地での調査は、県教育委員会文化財保護課兼康保明技師の指導を得て、昭和59年11月19日から12月18日まで行った。

発掘調査は、まず排土板をつけたバックホーを使用して、高岡塚古墳の石室と思われる石材が残されている付近に、東西方向1.5m×12mのトレンチ（試掘溝）を掘ったところ、

地表下約30㎝で横穴式石室の石組みを確認した。続いて、高岡塚古墳の東方約100㎡にある古墳推定地で、天井石かと思われた巨石（写真5）の周囲にトレンチを入れた。その結果、巨石の南側から東側にかけて、深さ50㎝以上にわたって現代の瓦礫の堆積が認められたのみで、横穴式石室を構成する石材でないことが明らかになった。そしてこの巨石は、石灰岩の露頭であることが判明した。そこで調査の主眼を高岡塚古墳に移し、埋没している横穴式石室を完全に掘出して、その全様を調査した。

調査終了後、高岡塚古墳の処置について協議した結果、いちおう横穴式石室は埋戻して、玄室の奥壁寄りの約半分の地上部を緑地公園とし、残りは盛土して道路となることになった。

発掘調査後の整理作業にあたっては、遺物の写真撮影に寿福滋氏、遺物実測に堀内宏司氏、横穴式石室の構築企画については加古川市教育委員会岡本一士氏の協力を得た。

3．高岡塚古墳の調査

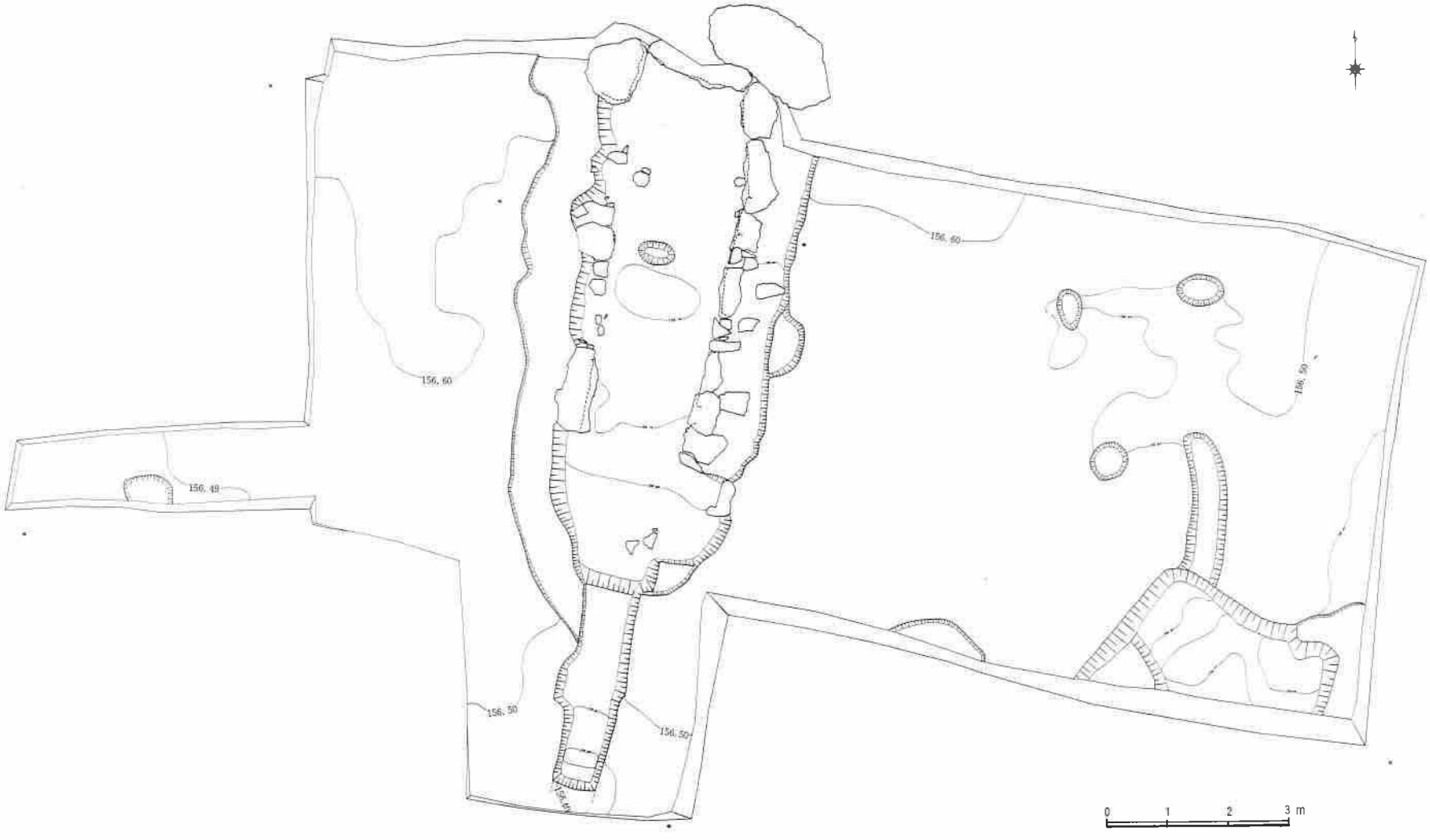
墳　丘

古墳の墳丘封土はすでに失われているが、発掘調査の結果よりみて、墳丘径約18ｍの円墳であることがわかった。墳丘築造にあたっては、古墳造営予定地の周囲を若干掘下げて、浅い溝で周囲を画するが、本墳には墳丘を全周した溝はなく、横穴式石室の東南側に巾約90～120 ㎝、深さ約19㎝ほどの弧状の溝が検出されたにとどまる。また墳丘には、埴輪、葺石、外護列石などの外部施設はなかったようである。

横穴式石室

主軸をＮ－15°－Ｅにおき、南々西に開口する片袖式の横穴式石室で、全長8.4ｍを測る。

玄室は長さ６ｍで、わずかに胴張りが認められ、巾は最大部で２ｍ、玄門部で1.5ｍを測る。玄室の床面は、奥壁付近に若干盗掘時の撹乱がみられるほかはほぼ水平である。注目すべきは、玄室のほぼ中央部に、床面の地山を掘込んだ60㎝×40㎝、深さ５㎝の楕円形のピットが検出されたことである。ピットの周辺は、後世に撹乱をうけておらず、またピット内の埋土も、石室内を埋めた後世の流入土と明らかに異なっている。おそらくこのピットは、築造当初に掘られて後、ただちに埋戻されたものであろう。奥壁は、天井石の落


156.60
156.60
156.50
156.49
156.50
156.50
0
1
2
3 m

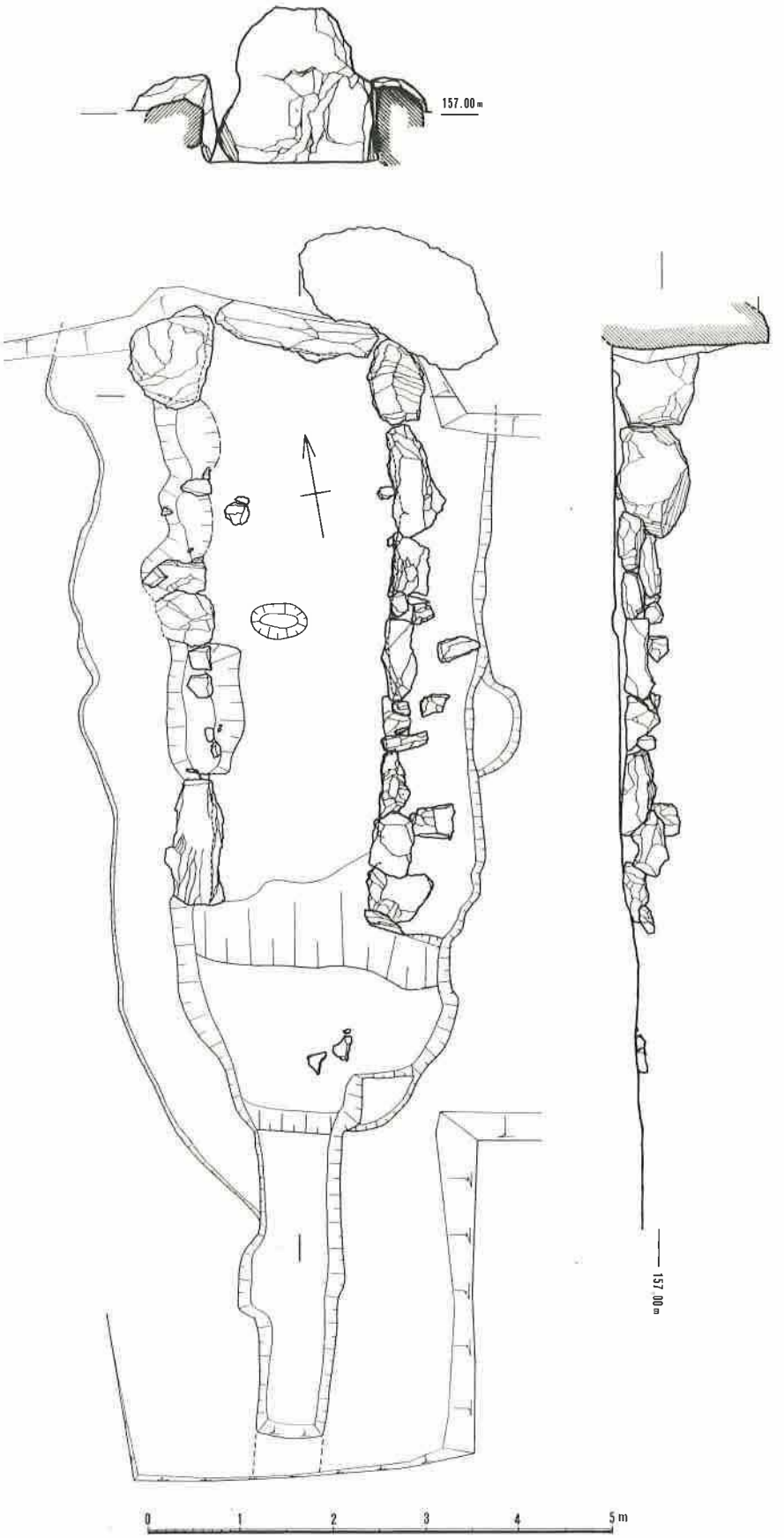
下によって、正位置より歪みを生じている。

石室を構築する石材は、奥壁のみ鏡石ともいうべき巨石を配するが、総じて小振な石が多い。そのため、石材の抜取りが著しいが、玄室と羨道の境界にあたる玄門部までかろうじて残っている。

羨道は、ほとんど石材が抜取られており、わずかに玄門部東側壁が残るのみである。また、羨道東側壁の南端に、側壁の最下底石を安定させるために据置いたと考えられる、人頭大の石が2点検出された。羨道の床面は、玄門付近で玄室の床面より急に上っており、さらに開口方向にむかってゆるやかに上って行く。最も床面の浅い最南端部が、羨門と考えられる。この羨門よりさらに南へ、巾80㎝、長さ約3㎞ほどの地山羨道がのびる。地山羨道の床面は、羨道とは逆に南へ少しずつ下っており、トレンチの壁面近くで急に深くなり、土質も変化することから、このあたりで終了し周溝となるのであろうが、溝の痕跡については今一つ明確ではない。

掘　方

完掘はしなかったが、横穴式石室と同方向に主軸をおき、石室部のみ全体に掘下げた掘方である。側壁の裏込にあたる掘方の埋土は、暗褐色粘質土に黄褐色粘


157.00m
157.00m
0
1
2
3
4
5m

質土がブロックで混り、互層のようにみえる土で、礫などを混ぜている様子はない。また、東側の掘方内にある石は、玄室側壁の石材が動かされたものであろう。

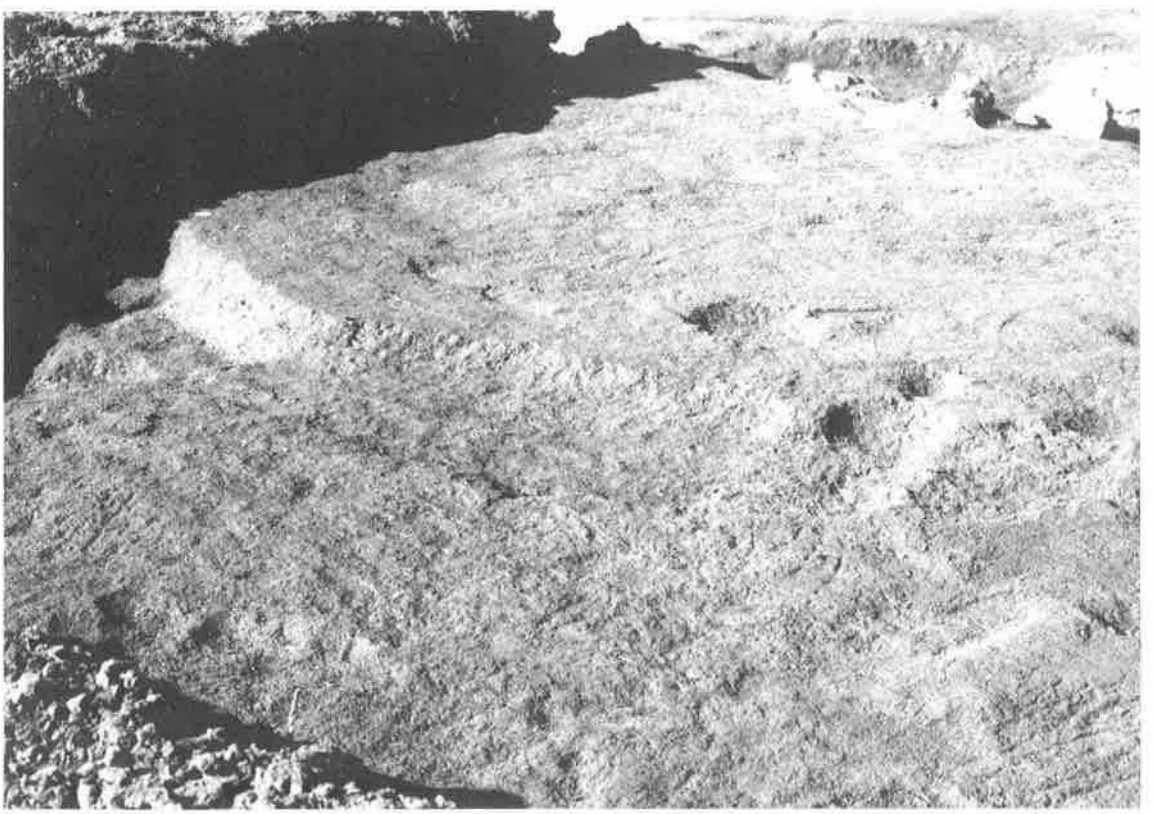
遺物出土状況

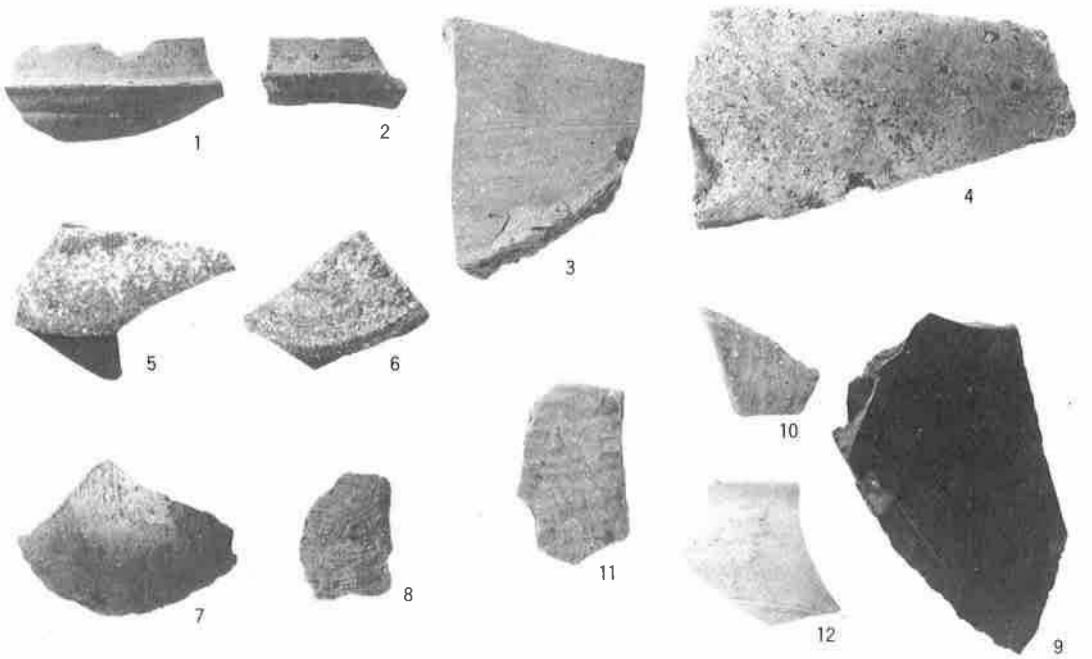
早くからの盗掘によって、横穴式石室内の遺物は細片にいたるまで、完全に取去られていた。ごく少量土器片の出土をみたが、そのほとんどは石材抜取り後の石室内埋土中からで、①、③、④の須恵器と陶器片が玄室部、⑧の土師器片が東側壁掘方埋土内、②、⑤～⑦の須恵器、土師器片が地山羨道よりまとまって出土した。この他、玄室床面より鉄釘の小破片が出土している。また、玄門西側壁寄りの地点と、地山羨道から骨片が検出された。

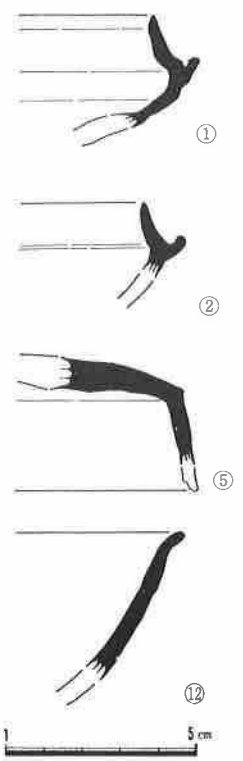
横穴式石室の東南にある弧状の溝内からは、⑩～⑫の須恵器と灰釉陶器片、隣接する撹乱坑内から⑨の須恵器片が出土した。

遺　物

須恵器は、原形を復原できるものはないが、①、②は坏身で⑤、⑥は坏蓋である。共に古墳時代後期の6世紀のものであるが、その形態からみて①、②は中葉、⑤はやや古く前半の時期が考えられよう。③は破片のカーブからみて、比較的大形の壺の胴部であろう。







⑨～⑪は甕の胴部で、叩きを施す。

⑦、⑧は土師器の甕の破片で、⑧は表面に刷毛目が残る。⑦は、表面の調整からみて、底部付近の破片と思われる。

⑫は、平安時代の灰釉陶器椀の口縁部の破片で、胎土、色調などからみて東濃系のものであろう。平安時代も11世紀のものと思われる。

④は中世の陶器片で、甕の胴部であろう。産地についてはわからない。

鉄釘は、断面四角形のものであるが、両端を欠失しており、形状など不明。

骨は小破片のため鑑定は難しいとのことであったが、玄門部出土のものは人の腕の骨と牛の角、地山羨道部出土のものは馬の歯の可能性が強い。

4．構築企画

古墳の横穴式石室および墳丘が、当時の土木技術の粋を集めて築造されたものであることは疑うまでもない。また、その形態や規模についても、何らかの規則性が存在することが早くから指摘されていた。ここでは残された横穴式石室を素材にして、高岡塚古墳の構築企画について考えてみたい。構築企画の検討には、「直線または円形によって構成する幾何学の援用で、白紙上にでも描ける」きわめて明解な方法論をとる、岡本一士氏の方法論を用いる（「古墳構築規矩論　その１　横穴式石室」　『元興寺仏教民俗資料研究所年報1974』所収）。

まず構築企画を行う前提条件として、石室の奥壁が歪んでいる点を修正したことと、左側壁の石の抜き跡から片袖式と考えた。

玄室方形プランの決定

玄室左側壁は、奥壁の左隅があまり動いていないと考え、この点と側壁中央の抜き跡の点を結んで、玄室方形プランの一辺とした。右側壁は石が残っているため、現状でほぼ無理なく直線が求められる。

企画線の想定

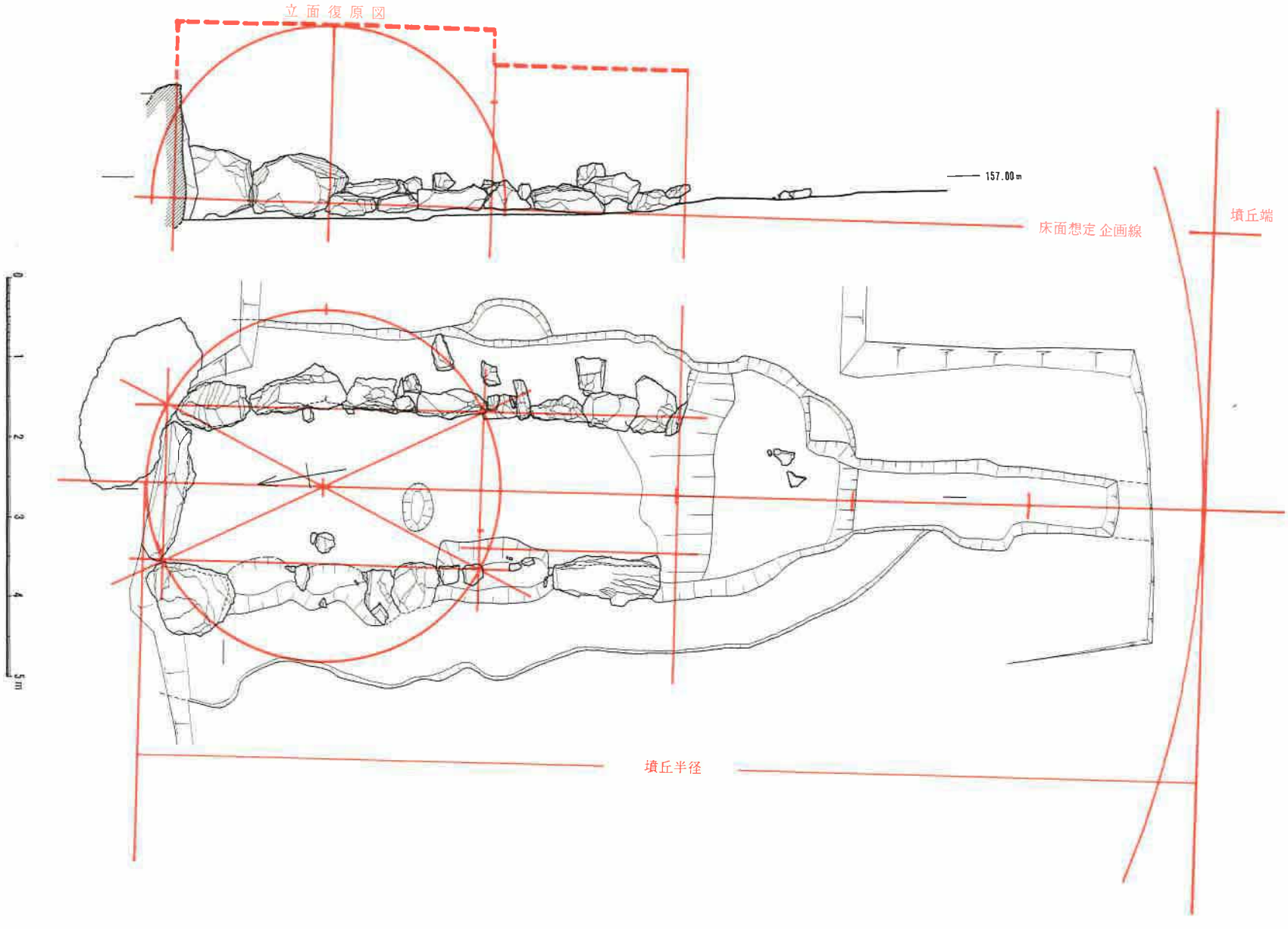
玄室の方形プランが決まると、次に企画線を設定し、中心線（墓心線）を求める。先に求めた方形プランと、各対角線の交点より求められる円をもとに墓心線を決定する。これから得られた半径を線の上に展開すると、１倍で現在の側石の端にくる。さらに１倍展開すると墓壙と地山羨道のそれぞれの端に相当する。

玄室袖部の企画

袖部の企画は、玄室幅線を二等分したものを、さらに二等分している。

墳丘の規定

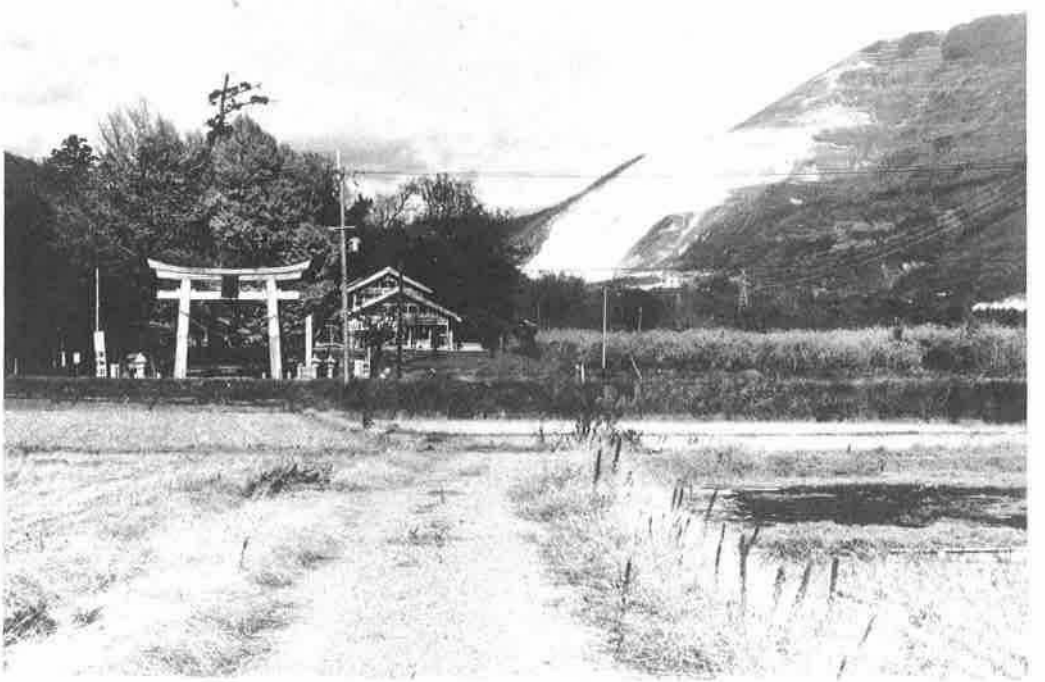
墓心線上に玄室半径を展開して行くと、石室南端よりそれを３倍することで墳丘端となる。その部分は地形的に段差が生じており、墳丘端と合致していると考えて良いであろう。また、ここで興味深いのは、１倍展開した部分である。本来は、この部分まで側壁の石があったと考えられるが、ここでは省略されて墓壙のみが側壁石の置かれる空間を示している。


立面復原図
157.00m
床面想定 企画線
墳丘端
墳丘半径
0
1
2
3
4
5m

5．む　す　び

今回の調査の結果、高岡塚古墳は早くから石室内部が荒らされており、石材も抜かれて他に転用されていることがわかった。そのため、出土遺物の大半は、後世周辺より流入したものである可能性が強く、古墳の年代を決定するにはいたらなかった。ただ、横穴式石室が１：２の比率を基本に企画され、２倍された部分に作られる側壁を１倍の距離に省略された構造をもっていることから、古墳時代後期から終末期への過渡的なものである。おそらく本墳の築造は、６世紀末～７世紀初頭頃の時期が考えられ、被葬者は古墳の規模や企画基礎単位などから、後の律令官人につながる階層ではなかったかと推定される。

（文責　兼康保明）



昭和60年３月

高岡塚古墳発掘調査報告書

編集・発行　山東町教育委員会

(財)滋賀県文化財保護協会

印刷所　冨士出版印刷株式会社